

復興庁総合フォーラム

東日本大震災からの復興の現状と取組

日時 2015年3月15日（日）13：30～15：30

場所 東北大学 川内萩ホール

被災地で活動する方々の声

引地 恵 氏：

ただ今ご紹介に預かりました引地恵です。今日はどうぞよろしくお願ひします。

私たちは、中古着物地で、リメイク雑貨を製造販売しています。

私は震災後に、亘理町で起業しました。宮城県亘理町、仙台から南に電車で40分、人口3万人の小さな城下町です。真っ赤な甘いイチゴで有名です。私はこの町で生まれ育ちました。資料館の学芸員として、民俗調査に関わり、養蚕や縫製が盛んだった町の歴史を知り、何十年もの時を越えて、親の愛を受け継いでいる嫁入り支度の着物にも出会いました。

2011年3月11日、東日本大震災が起きて、私の町でも津波で多くの命が失われました。積み重ねてきた暮らしや、人の心を支えてきたものが一瞬で消えて、仕事も、みんなが集まる場所もなくなりました。私は役所内で、支援物資の担当になり、復興業務に追われている最中、父が病気でこの世を去りました。すべてがもう起きてしまったことで、誰のせいでもない。そう分かっているけど、やっぱりやり切れない気持ちでいっぱい過ごしていたのを覚えてます。

夏に民俗調査を再開し、亘理では、昭和の中頃まで、家族の衣類はその家の女性たちが仕立てていたことを知りました。縫うことは、女性にとって生活の一部だったのです。

そして、農家で一つの中着袋に出会いました。亘理に暮らす女性たちは、着物を仕立てた残り布で中着袋を作り、中に一升のお米を入れて、お祝いやお返し、手土産にしていました。小さな布も大切に、たくさん縫いたため、いつでもすぐに「ありがどね」って、気持ちを手渡していたんです。

袋がなまって「ふぐろ」。この「ふぐろ」が、時間軸を超えて、それまでの自分とは違った生き方、感謝を形にする生き方を伝えてくれました。この「ふぐろ」に詰まった地域の返礼文化、縫製技術、感謝しあう価値観、それらを次の世代に、たくさんの人に伝えたい。そのために、これを形にし、商品として経済的価値を持たせたい。それがこの事業の原点です。

被災した町内の呉服店から、着物地を譲り受け、妹と友人に声をかけ、2011年秋から製作を始めました。初めはまさに、家内制手工業でした。そして誕生したのが、この新しい「FUGURO」です。

商品にするために、アイデアを出し合い、工夫をこらしました。まず、名前をローマ字にして、新たにリメイクしたイメージを持たせました。次は、デザインです。裏地には鮮やかな色を組み合わせ、紐の先にかわいらしい飾りをつけて、現代のファッションにも合うもの

にしました。仕上がりにもこだわりました。

そして、事業を続ける中で、地域の課題に気付かされました。震災後、若者の流出が進み、亘理町の高齢化率が高まっています。知恵や技術を伝承する世代間の交流の機会も失われています。震災の影響による社会減で、人口は5%も減少。崩壊した地域コミュニティの再構築には、長い時間がかかりそうです。また、地元で働きたいという女性のニーズは高いものの、求人はまだ少なく、私は次第にこうした課題の解決に役立ちたい、と思うようになりました。そして、地域の中に、三つの良い循環ができました。

一つ目。文化や技術の伝承の場ができました。二つ目。震災で失われたコミュニティが、仕事を通して再び形になりました。三つ目。フレキシブルに働ける、女性にとって魅力的な職場が生まれました。継続と発展のための事業展開としては、着物地の提供者には、感謝を込めて、お礼の品を送り、ファンとリピーターをつくります。地元女性に技術を学ぶ機会を提供し、商品の制作を委託。企業や団体と連携しながら販売し、ネットワークをつくります。こうして、被災地域に、小さいながら「ひと・もの・お金」の流れを生み出しています。

日本の衣料品のリサイクル率は、20%以下。そんな中で、私たちは、昨年1年間で、タンズに眠る着物地、約2.3トンを回収し、亘理の女性たちの手で蘇らせ、着物地の価値を高めて、再び世に出すアップサイクル文化を醸成しています。

地域経済の活性化にも取り組んでいます。地元の人材や専門業者の活躍の場をつくり、購買や仕入れなどで被災地域内にお金を落としながら、事業を進めています。昨年度、約100万円だった納税額を、さらに増やせるよう、株式会社設立の準備も進めています。出来ることも、動かせるお金もまだ小さいものではありませんが、被災地に暮らす私たちが、こうして事業を興し、それを継続することが、復興や新たな地域の創生につながることを願っています。

販路も国内外に広がり、自社でのWeb販売もスタート。仙台三越、丸善仙台など、常設販売店舗も増え、地元での認知度も少しずつ高まってきました。自分たちの成長とともに、商品も多様化してきました。今後は三つのブランドに分けて、価値を高めていきます。

「FUGURO」は、地域の特産品へ。着物地の小物類は、暮らし方を提案する、おしゃれな雑貨ブランドへ。地元で伝わる「裂織」という技術も、小物作りに活かしていきます。開発中の手芸キットは、作り方のレシピに、材料をセット。ものづくりの楽しさを、たくさんの人と共有するブランドにしていきます。

今後は、百貨店などの販路を、さらに拡大。認知度を高め、オリンピックの関連商品となることを目指しています。そのためには、お客様の関心を高め、憧れを抱いていただけるようなプロモーションが必要です。昨年、スイスの高級腕時計メーカー、ジラール・ペルゴの限定モデルパッケージに「FUGURO」が採用されました。アメリカのハイエンドのアパレルブランド、トーマスワイルドと、コラボ商品も制作。女性ファッション誌「25ans（ヴァンサンカン）」で誌上販売も行いました。また、亘理に精米所を持つアイリスオーヤマの生鮮米と「FUGURO」の、復興応援コラボレーションギフトも販売。中にお米を入れて感謝

を手渡す、あの「ふぐろ」のストーリーを現代に再現しました。人気スタイリストとのコラボ商品も開発しながら、さまざまな話題を生み出し、ブランドイメージを高めています。

着物地は、長い歴史の中で培われてきた日本人の美意識や感性そのもの。おめでたい文様には、まとう人の幸せを願う気持ちが表れています。私たちは、日本の伝統美に、亘理の返礼文化をプラスし、グローバル市場へと展開します。2月には、ドイツの見本市、アンビエンテにも出展しました。

WATALIS は、亘理町の「WATARI(わたり)」と、お守りという意味の「TALISMAN (タリスマン)」を組み合わせた造語。そこには、五つの W があります。WATARI の W、Woman の W、Wrapping、Wonder、World の W です。これからも日本の伝統や文化を一つ一つの商品に縫い込み、お守りのように大切に、人から人に手渡していきたいと思っています。

WATALIS の事務所には、毎日のように、学校帰りの子どもたちが立ち寄ります。地域の伝統や文化を身近に感じながら生きることは、ふるさとを誇らしく思う気持ち、生まれ育った地で生きていこうという思いにも、つながるはずです。母親の働く姿を通して、一生懸命働くことの尊さ、チャレンジする勇氣、そして一人一人ができることは小さくても、それを集めて続けることで大きな力になることも、子どもたちに伝わると信じています。これからも亘理の女性たちの感謝を包む仕事で、幸せを世界につないでいながら、まずは私たちのできることから、女性たちの小さな本気で、新しい東北の未来づくりにチャレンジしていきます。ご静聴ありがとうございました。（了）